リビングデットのまおう様

浅緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リビングデットのまおう様

【Ｎコード】
Ｎ５９０８Ｑ

【作者名】
浅緒

【あらすじ】
俺は死んでしまった。だが妹様のおかげで生き返った。そう魔王として！！
高校入学仕立ての主人公。そんな彼のまわりに勇者やらなにやらが襲撃をかける！
なんでもありのぶっ飛び系学園ファンタジーコメディ！
勇者「バトルもあるぜ」
妹「ハーレムもあるかも？」
魔王「たまに涙が！？」

全員「「ありません」」

第1幕　妹様のおかげで生き返る

俺は死んでしまった。

この世にはどう頑張っても抗いようがないものがある。

――不治の病……。

それまでこれといったこともなく、平々凡々に暮らして来た俺だったが中学3年の夏に体調を崩し、そのまま入院。

そして医者から下された宣告。余命は後おおよそ半年なんて酷く現実味がなく、無情なものだった。

中学校はおそらく卒業出来ないだろう、だと。

もう手の施しようがない。完全に手遅れ。俺はそうしてただ死を待つだけのモノへとなった。

絵空事のような薄っぺらな日々。

そして俺はポックリ死んでしまった。

だがしかし俺は生き返った。

魔王として。

私立七見学園高校校歌

新しい朝が来た。希望の朝が……――。

まてこれどう聞いてもラジオ体操の歌だろ？

と、まあ、そんなことは棚の上に茶菓子と一緒に置いておくことにして、細かいことは気にしない。それが魔王ってもんだろう。

中学は卒業出来ないと言われていた俺だが愛しの妹様の活躍があり魔王として生き返った。なぜ生き返ったのか？とか、なんで魔王なんかになったのかったか？とか気になることは多々あると思う。それについて俺から言えることはわずか一言。気にすんな、以上。

追々語ることもあるだろうとだけは言っておく。

そんなことよりである。今は晴れて高校生になれたことを喜ぼうではないか。

本来なら死んでいて通うことが出来なかったはずの高校にこうして無事通えること。とても嬉しい訳である。魔王でも嬉しい。

あまりの嬉しさに校長先生のどうでもよさげな話を一字一句間違えずに記憶だって出来そうだ。

「えー、であるからして、えー、えー、えー……」

やたらとえーが多い校長だ。くっ、何故だ、急に眠気が……まさかあの校長のラリホー！？ふっ魔王に状態異常眠りとはあの校長並の魔女っ娘じゃないな。今後あの校長は要注意だ。

そして俺は入学式を寝て過ごすのであった。しゃーなしだ。

寝て起きたら入学式は終わっていた。担任の指示に従ってクラスへと向かう。俺のクラスは１年１３組。大変演技の悪い番号だが、魔王には丁度いい。

しかし、おかしなことながら、この１３組の隣の組はＡ組となっている。ちなみに反対側のクラスはＣ組。

ん？そこで気が付く。よくよく見ると１３組ではなくＢ組だった。１と３が少し離れていてぱっと見１３に見えていたのだ。

今さらだが、これは激しくどうでもいい話だな。

ぞろぞろと教室の中へと入っていく。そこで、予め指定されていた席へと着く。俺は窓際いちばんうしろの大魔王席だ。主人公ポジショングッジョブ！

俺はそこからぐるりと教室の中を見回した。どいつもこいつも知らない奴ばかり、隣の席はイカみたいなイカだったが気にするまでも

ないな。おそらく侵略でもしに来たのだろう。

そのなかで一人だけ見知った顔を見つけた。

黒髪のおさげ、気の弱そうな瞳に、どこかおどおどした雰囲気の少女。

平井坂之下蓬（ひらいさかのしたよもぎ）。

俺と同じ中学出の級友で俺の嫁（予定）。長い苗字を略してヒラサカの愛称で呼んでいた。そして俺の最後を看取ってくれた唯一の娘。よかったヒラサカとは同じクラスだったのか。

ヒラサカはうつむいて視線を机に向けている。おそらくは趣味の机の木目数えでもしているのだろう。

「はい注目」

パンパンと手が二度叩かれた。

にわかにざわめく教室に響くそれは担任教師によるものだった。

「俺がこのクラスの担任になった中根だ。一応ヨロシク」

どこか投げやりな態度な３０代後半であろうオッサン。そんなオッサンが言う。

「突然だがお前らに転校生を紹介するぞ」

このタイミングで！？今日は入学式当日なんですが！？

「おい転校生入ってこい」

担任の呼び声とともにガラッと教室の扉が開いた。そしてガッシャガッシャと大層な音を立てて西洋甲冑を身につけた美少女が姿を表した。

髪は燃えているかのよう真っ赤で、後ろでまとめ噴水のようになっている。気が強そうなつり目もあって、刃物のように鋭い雰囲気を発していた。

「私はオリン・オリンピック・オリアナ！職業は勇者だ！」

いや高校に来てるんだから職業は学生だろ。

「私は魔王を倒しに来た！突然だがこの中に魔王がいる！」

なんだと？俺は驚愕せずにはいられなかった。まさかあのイタい女俺が魔王であることを知っているのか？

まあ、別に隠してるわけでもないし知られていても問題ないわけだけど。

「目を潰れ！そして下を向け！よし上出来だ。では自分が魔王だというものは手をあげるんだ」

このクラスでいじめがあります的なノリ。俺は俯いたまま手を上げた。嘘はつかない主義。

「……よし、わかった。みんな顔をあげてくれ」

言われて顔をあげるとオリンピックはビシッと擬音が出るぐらいの強烈な勢いで俺を指差した。

「おまえが魔王かーー！」

……え？ここでそれ？わざわざ顔を伏せさせたのは他のやつらに知らせないための配慮とかじゃなかったの？

クラスメイトに俺が魔王だっと一瞬でバレた。

「そう俺が魔王だ！」

高らかに宣言。ざわっざわっとどよめく教室。これは予想以上に恥ずかしい展開。変態電波野郎とか思われてるのかな……。

「ここであったが初めましてだ！では魔王！私の経験値になるがいい！」

だっとオリンピックがオリンピックに出場する幅跳び選手ばりの跳躍。速い！俺に向かって跳び、拳を振りかぶった。

いやまて、まさかここでおっ始める気か！？　ここには俺の嫁のヒラサカがいるんだぞ！？

咄嗟の回避行動。オリンピックの攻撃を横に跳んで避ける。

ガシャーン！盛大な音と共に俺の机が枯れ木のように、窓ガラスを突き破り外に吹き飛んでいった。

「避けるとは卑怯だぞ魔王！」

卑怯？いやだって魔王だし。

ぷんすかと頬を膨らませて怒るオリンピックはちょっと可愛いかった。

だがしかし俺は魔王！いくら可愛かろうが、いきなり攻撃を仕掛けてくるやからに容赦はしない！やられて黙っているほど大人しくもない！

右手に魔力を集中。サッカーボール程の黒い球体を造り出しそれをオリンピックに放つ。

「……ちっ」

かわせないことを悟ったオリンピックは両腕のガントレットを交差させて防御の姿勢。そこに俺の放った黒玉が衝突。

瞬間。黒玉に込めた魔力が破裂した。

その衝撃にたまらずオリンピックの身体が先の机のように、窓の外へと弾き飛ばされた。

よし上手くいった。

後を追うように俺も窓の外へと飛び出す。さすがに教室内でドンパチするのは気が引けると思っての配慮だ。

見ると吹き飛ばしたオリンピックがくるくると2、3回転して華麗

に校庭に着地した。思わず１０点！とか点数をつけたくなる。俺もそれに続いて地面に降りる。

「流石は魔王なかなかやるな」

校庭に降り立ったオリンピックは平然としていた。さっきのアレは大したダメージにはなっていないようだ。

「手加減したつもりはなかったんだが、こうも平然としてるとは」

「はっ、魔王風情が調子に乗るなよ。ここからは本気でいかせて貰う！」

オリンピックは両手を前に翳す。バチバチと静電気のような電流が発生した。

「契約（エンチャント）執行！！」

バリバリと稲妻のような音を発っし、なにもない空間からなにか棒状のモノが姿を表す。

”契約（エンチャント）執行”手元に自身の武器を呼び寄せる下位魔法だ。

オリンピックの手にした武器は２メートルをゆうに越すであろう長い棒状の武器。尖端には刃物のようなものがついている。あれは槍か？

「魔槍グングニール！！」

くるくるとその槍を器用に回し、ビシッと構えて決めポーズ。矛先

が俺に向けられる。

ん？俺はその矛先に違和感を覚えた。まじまじとその矛先を見る。

あれ？矛先が矢尻じゃなくて鋏になってる？

さらによく見る。オリンピックの手元。槍の持ち手の部分。そこがトリガーのようになっていた。

これはまさか……。

「それ高枝切り鋏じゃねーか！！」

高いところの枝にも楽々届く、噂のあれである。

「な、なにをぅ！？おおお、おおま、おまえっ……！わ、私のグングニールを馬鹿にするのか！？凄く高かったんだからな！！」

「通販か！？通販なんだろ！？それ通販で買ったんだろ！？」

「フリーダイアルだから電話代はかかっていない！」

「そんなこと聞いてねーよ！」

「このグングニールはな凄いんだぞ！アタッチメントを付け替えればゲイボルグにもカラドボルグにもランスロットにもなるんだからな！」

「またコラッ！最後のランスロットは槍の名前じゃなくて人名なんですけど！？」

「……あ、アタッチメント『ノコギリ』！モードランスロット！」

「あ、てめぇ！今誤魔化したろ！」

「う、うるさい！黙れ！バカ！バカー！ごちゃごちゃうるさいんだよ！魔王の癖に！魔王の癖にー！おまえは大人しく私の経験値になっていればいいんだ！」

「なんだそれ魔王差別か！魔王差別なんだろ！それがイジメの一歩だかんな！」

「そんなの知るか！いくぞ魔王！オリン・オリンピック・オリアナ！参る！」

オリンピックは踏み込み俺との間合いを一気に詰めてくる。

一閃。横薙ぎに高枝切り鋏振るわれた。ぐ、速い……。それを紙一重でかわす。高枝切り鋏の癖にいい太刀筋だ。

「まだまだぁ！」

連撃。上下左右斜めありとあらゆる方向からの鋏の嵐。まるでミキサーのようだ。触れれば即座にバラバラにされる。

こちらは素手で武器はない。これでは不利だ。一度距離をおくか。

右手を翳しそこから広範囲の黒い焔を放射する。威力はない、これはあくまで目眩ましだ。

オリンピックは警戒して大きく後ろに跳ぶ。俺もそれにあわせて後ろに跳んだ。よし、十分距離は開いた。

見るからに近、中距離戦闘タイプのオリンピック。で、俺はというとオールラウンダーのオールレンジなんでもござれの万能アタッカーでありディフェンダーである。魔王だし当然だ。

だがしかし、殴り合いとかチャンバラとか無粋で野蛮だ。故に遠距離攻撃最高。自身の手を汚さず敵を倒すとか最高だろ。

さて一気に行くか。

両手にありったけの魔力を込める。それを空に翳しそこにはひとつの黒い球体が現れる。

辺りの空気がその黒い球体に集まるように渦を巻く。”ブラックホール”それを形容するならばその表現がピタリと当てはまる。

「ひゃーはっはっはっ！圧縮！圧縮ぅ！空気を圧縮ぅ！」

「ベクトルを操っているのか！？」

「さあ、愚民共！俺にちょっとずつ元気を分けるんだ！」

「おまえそれで地球を割るつもりだろ！？この恩知らずが！」

徐々に大きさを増していく黒い球体。

「くっ、なんて魔力だ……あんなものを喰らったらひとたまりもな

い。流石は魔王。だがこの私がそんな隙だらけものを打たせると思うか！」

オリンピックが俺に向けて突進してくる。これまでで一番速い。

だが遅い！こっちの魔法が完成するのが先だ！

「くらえ！アクセラレーターリベンジデスボール！」

「名前が長い！って、キャーーー！」

放った黒い球体がオリンピックを飲み込んでいく。

ふっ、終わったな。勇者といえどこの程度か。口ほどにもな……――。

「うぐ……！？」

ブスリと嫌な音がした。何故だろう、右脇腹が焼けるような痛みを発している。

ああ、これは大変見たくない。出来れば無視したいが、右脇腹の痛みは到底無視出来るようなものではなかった。

恐る恐る見る。右脇腹には高枝切り鋏のノコギリのアタッチメントが深々と刺さっていた。

あの野郎やってくれる。

「……これは油断した……――ゼッ！」

そのノコギリを力任せに引き抜いた。ノコギリの刃が俺の中身を抉った。飛びかけた意識を無理矢理引き戻す。結構深く刺さってやがった。

ドロリと傷口からどす黒い血が溢れた。これは勢い任せに引き抜いたのはまずった。出血多量で死ねる。

ばたりと俺は自分が作った血黙りの中へと沈んだ。

第2幕　通販メイド勇者

俺の妹様を紹介しよう。

和波ぎゃろっぷ（わなみぎゃろっぷ）

名前についてのツッコミは無しの方向でお願いしたい。

さて改めて俺の妹自慢をしよう。

まず可愛い。馬鹿みたいに可愛い。セミロングの茶髪に花の紙留め、胸はまだ成長途中ではあるがすらりと長い手足はまるでモデルのようで、道行く人は男女問わず老若ニャンコすべてが思わず振り返ってしまうほどの可愛さだ。俺もあまりに可愛すぎて何度夜中に布団の中に潜り込んだかわからない。

まあ、その度に弁慶の泣き所を釘バットで骨が粉々になるまで撲られるが、俺はそれでも布団に潜り込むことを止めなかった。勿論全裸だったのは言うまでもない。

ちょっとお茶目だが、半端ない可愛いわけである。

そして、頭もいい。ＩＱ２００の超天才で完全記憶能力も備えている。おかげさまで僅か5歳にして大学卒業したとかなんとか。兄だが詳しいことは知らない。

そんな大天才の妹様だが、運動となると致命的にダメだったりする。

３歩走れば息はきれる。ボールを投げれば１０センチしか跳ばない上に肩を脱臼する。縄跳びは一回も跳べないだけではあきたらず、何故か縄が全身に絡まり亀甲縛りのようになる。

そんな感じに運動オンチなわけだが、ぶっちゃけそこは萌えポイントなので問題はないだろう。そして俺はまた妹様の布団の中に潜り込み、釘バットでぐちゃぐちゃにされる。運動オンチの妹様だが何故か俺を撲っている時はまったく息切れしないのは謎である。おそらく愛の力と思われる。

そんな超激無敵に可愛く最強伝説的な天才で全力殲滅されるほどに運動オンチな妹様。

だがしかし俺の妹様自慢はこれだけでは終わらない。

なんてたって妹様はこの俺を生き返らせたんだからな！

「お兄ちゃん！いい加減、起・き・な・さ・い！」

「お、おぉお！？起きた！いや起きてたよ！寝てなんかないよ！だから釘バットは！釘バットだけは勘弁！」

慌てて布団から跳び起きた。

「うぐ……」

ずきりと右の脇腹が痛んだ。思わずその場で疼くまる。

「あぁ、もうダメですよ、お兄ちゃん。まだ傷口が完全に塞がったわけじゃないんですから、安静に横になってなくちゃ」

「いや、起きろって言ったのきゃろちゃんじゃん！」

俺は妹様のことをきゃろちゃんと呼んでいる。超可愛い。

「お兄ちゃん永眠させますよ？」

「すいませんでした！今すぐ横になります！」

俺はマッハで布団に横になった。

「まったくお兄ちゃんは……いくら魔王だからって無茶は禁物ですよ。まだお兄ちゃんの身体に魔王の魔力が完全に馴染んだわけではないんですから。それなのに脇腹に大穴空けて……私が駆け付けるのが速かったからよかったものの、下手をすればまた死んでいるところだったんですよ？」

そうか妹様が助けてくれたのか。

ここは俺が住まう真殴外荘（まおうがいそう）の２０２号室。四畳半に流し台とトイレ尽き。風呂場は一階に共同浴場がある。実は一人暮しである。ちなみに妹様は俺の隣の２０１号室に住んでいる。

両親？都合よく海外出張ですがなにか？俺達二人を家賃月１０００円のいわくつきボロアパートに押し込んでどっかいったわけである。

閑話及第。

意識を失ったあと俺をここまで運んでくれたのか。

「ああ、悪い。ちょっと油断した」

なんせ魔王だし。慢心、油断はおてのもの。

「まったく馬鹿なんだから、お兄ちゃんは……」

言って妹様は俺の寝ている布団の上に顔を伏せる。

俺は布団から片手を出してそっと妹様の頭を撫でた。

「よし！充電完了です！」

ばっと妹様は起き上がった。

「お兄ちゃん私はこれからでかけなくてはいけません」

「出掛ける？」

「はい、本当なら私がつきっきりで看病したいところなのですが……またお兄ちゃんの魔力を嗅ぎ付けてこの辺りに病鬼（やんきぃ）が大量発生しているんでサクッと皆殺しにしてこようかと」

”病鬼”この現界（俺達が住んでいる世界）とは別の幽界に住んでいる生物。所謂、魔物とかモンスターとか妖怪とかそんな類の生き物。

「そうか、気をつけてな」

心配はいらない。なんせ俺を生き返らせるためにかつての魔王をぶち殺した妹様だ。戦闘力は二つの世界を合わせて最強最悪。

「で、なんですが。流石に怪我をしているお兄ちゃんを一人残して行くのは気が引けるんでメイドさんを用意しました」

「メイドさん！？なんて甘美な響き！」

「はい、ちょっとまっててくださいね。今連れてきます」

そう言うと妹様は部屋を出て行き、またすぐに戻ってきた。

そして隣にはまごうことなきメイドさんが一人。フリルの白と黒のエプロンドレス、スカートの丈はやたらと短く、それを気にしてか裾を掴んでぐいぐいと引っ張っている。その恥じらい具合が堪らない。

そんな真っ赤な噴水ヘアーのメイド美少女がいた。激しく見覚えがある。

「紹介しますね。お兄ちゃんの専属メイドのオリリンピックさんです」

「違う！私はオリン・オリンピック・オリアナ！職業は勇者だ！」

それはさっき俺に襲いかかってきた勇者様その人だ。

「あ、オリりんじゃーん。さっきぶりー」

フレンドリーに接してみる。

「だ、誰がオリりんだ！萌えキャラみたいに呼ぶな！私はオリン・オリンピック・オリアナ！職業は勇者だ！」

「オリりんそのメイド服可愛いな」

「だから私は――って、か、可愛い！？お、おまえはなにをいってるんだ！？わ、私が可愛いだなんて……」

ぼっと火がついたように顔を真っ赤に染めるオリりん。あたふたしてる。ちょっとほっこりした。かーわーいーいー。

「あらオリリンピックさんはもうデレ期ですか？お兄ちゃんの魅力にもうころりですか？でもダメですよお兄ちゃんの正妻は私ですから」

「誰がデレ期だ！それと私はオリン・オリンピック・オリアナ！職業は勇者！」

「そんなことはどうでもいいです」

妹様華麗にスルー。

「とにもかくにもオリリンピックさんにはお兄ちゃんに怪我をおわせた責任をとってもらいます」

「いやまて！確かにこいつに手傷を負わせたのは私だけど、私だってこいつに殺されかけたんだ！？」

「……こいつ？オリリンピックさんこいつとはなんですか？」

ゴゴゴゴッ！笑顔の妹様、だがしかしその背後には破滅の魔王的オーラを背負っていた。

ひぃ！と震え上がるオリりん。勇者様は妹様にマジビビり。ちなみに魔王様も妹様にマジビビり。

「さっき教えたはずですよ。お兄ちゃんのことはご主人様ですよ」

「はひぃ！そうだったでした！ごめんなさい！ごめんなさいー！」

オリリンピックは妹様に必死で土下座を繰り返す。あ、パンツ見えた。淡い緑だ。

「私に誤ってどうするんですか？誤るべき相手はお兄ちゃんでしょ？」

「はい！ご主人様！ごめんなさい！」

今度は俺に土下座をするオリりん。

「俺は気にしてないから、そんな謝んなくて大丈夫だぞ」

下がったオリりんの頭を優しく撫でながら言う。

「き、気安く頭を触るな！撫でるなー！恥ずかしいじゃないか！？このバカ！バカー！」

うがーと立ち上がるオリりん。林檎みたいに真っ赤な顔だった。

「オリリンピックさん」
絶対零度の冷たい声。寒い！ヒャド、ヒャダルコ、マハブフダイン！
「ひぃ！？」
オリりんが小さく悲鳴をあげる。
「これはなんでしょうか？」
妹様はどこからともなく高枝切り鋏を取り出した。
「それは私のグングニール！？」
見覚えがあると思ったら、そうかさっきオリりんが使っていた武器か。
「えい」
バキッと音を立てて妹様はその高枝切り鋏を一瞬の躊躇も容赦もなくへし折った。素手で。
「きゃーーーー！？ぐんぐにいいいいいる！！」
オリりんの断末魔の叫びが真殿外荘にこだました。妹様マジ容赦ないっす。
「生意気なメイドにはお仕置きです」

ぽいっと二つになったグングニールを床に放り投げる。オリりんはそれに駆け寄り膝からがくりと崩れ落ちた。さらにはポタポタと涙まで流し始めた。

ああ、痛々し過ぎて見てらんねぇ。

「おまえ……」

オリりんがゆっくりと立ち上がる。真っ赤な噴水頭が燃えるようにゆらゆらと揺らめく。

「高かったのに！高かったのにー！グングニールの仇はとらせてもらう！覚悟しろ！」

オリりんが妹様に飛び掛かる。なんて無謀な……。

「ふう、やはり貴女には教育が必要のようですね」

パチンッ。

妹様は指を一度鳴らすと天井から謎の紐が降ってきた。天井で固定されているのかその紐はぶらんとぶら下がっている形だ。

そして妹様はその紐を引っ張る。

「へ？」

ガコンとオリりんの真下の床が開いた。呆気にとられるオリりん。

「きゃーーーー！？」

見事にスポリとオリりんはその穴に吸い込まれていった。

「お、落とし穴！？」

「その先は地下室です」

「一階じゃないの！？」

ここは2階。下は一階じゃないのか？

「この穴は地下室への直通です」

「ていうか地下室なんてあるんだ」

「ふふふ」

妹様は妖しく笑う。ぞくりと寒いものが背筋を駆け上がった。これ以上聞くのは止そう。薮蛇にしかならん。

「それじゃお兄ちゃん行ってきますね。あ、オリリンピックさんは従順な雌豚に仕上げて、また直ぐにこちらに来させますからご心配なさらずに」

別の意味でいろいろ心配なのは言うまでもない。雌豚とか妹様の口から聞きたくなかった。

「アレには身の回りのお世話から、それにお兄ちゃん最近あんまり自家発電してないみたいなので溜まってますよね？ですから夜伽、朝伽、昼伽、なんでもやらせて構いませんから、どうぞお楽しみ下

さいね、お兄ちゃん」

とんでもないことをさらりと言って、妹様は部屋をでていくのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5908q/

リビングデットのまおう様

2011年10月5日01時15分発行